

巻頭言

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-06 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00064237

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



卷頭言

春季到来とともに、金沢の文学行事は三月二十六日の室生犀星忌にはじまる。今春は、その犀星に私淑する大江健三郎氏が来沢し、「方法としての文学」につき講演会が開催された。例年繰りひろげられる当地の文学館における諸行事を通して、改めて奥深い文学的伝統の基盤を認識する。

また、金沢ゆかりの作家五木寛之氏も、目下鴨長明に興味を抱き、諸資料を涉猟しつつあるという。

従前、長明については、大家・中堅・新進の諸学者の精力的な論文が陸續と発表されて来たが、仔細に検討してゆくと、意外なことに基礎的諸問題が相当に未開拓のまま放置されていることに気づく。例えば、彼が妻子と暮らしていた生活環境の実態をはじめ、父の死後いかなる状況下に祖母の家を手離したのか、また、寄人に抜擢された頃の本拠地や、河合社の稱宣事件を背景とする大原出奔の実情など具体的履歴が、殆ど不明か臆げにしか捉えられていない。更に、彼は後鳥羽院や土御門家・九条家の何れの貴紳にも保護本能をかき立てた人物であつたらしい。奇人祥命の裏面における通親の庇護、『新古今和歌集』編纂時における院や良経の好意、雅経・慶政などとの親交は、大いに今後解明の俟たれる課題である。

長明の精神構造や思想面の考察には、『方丈記』より遥かに大部な『発心集』の説話評論部に関する徹視的究明こそ、焦眉の急を要するも、やっと端緒にいたばかりである。『無名抄』の内容面の考究や構想・成立過程も等閑視され、未だ研究はスタート・ラインを幾らも出下ゆかない。

さて、われわれは如上の諸状勢の下に、『発心集』特集を二号に亘って刊行して来たわけであるが、研究課題の測り知れぬ深淵さを管見し、第五号も三たび総合的見地に立って「鴨長明特集」を企画した。同人の収録論文は、先学の諸見解に触発され、読書会や月例研究会にて問題提起した八論Vを土台としたものである。ここに博雅の御教示を切に冀求するものである。今回の報告も、さまざまな制約により問題提起の域にとどまった面が強いことは、十分に自覚している。

このささやかな一石の投入が、中世隠者文学研究の上に小さな波紋を生じて呉れば、望外の幸せである。

なお、金沢古典文学研究会の月例研究発表会が、本年九月で七十回を数える。想えば、金沢大学附属図書館大ゼミナル室にて、昭和四十六年十二月に第一回発表会を開催して以来、足掛け七年の間、一回も休まずよくぞここまで続いて来たものと思う。これも、先学・諸賢の御支援・御鞭撻の賜物と、深く感謝する次第である。

昭和五十二年五月

金沢古典文学研究会一同